

# 清流

題字：芳野 充

令和2年12月30日  
第48号

発行所 加来不動産(株)  
発行者 加来 寛  
北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

穏やかに  
静かに  
清流のように

## 腹を決めて一歩ふみ込む

わたしには、「あのときの、あの行動があったからこそ今がある」と思えるできごとがあります。それは、今から十数年前の朝礼で、大粒の涙をこぼしながら、スタッフにたいして謝罪したことです。

今ではありがたいことに、スタッフ全員がわたしの想いをくみ取って行動してくれています。しかし、十数年前は現在とはまったくちがう会社のようにでした。

当時、わたしをふくめて5名だったころ、一人ひとりがちがう方向を向き、組織とよぶにはほど遠い状態でした。無断遅刻や欠勤が日常茶飯事で、始業開始しても全員がそろうことはめずらしく、ひどいときはわたし一人だった日もありました。また、何かおもしろくないことが起ると、不愛想で不機嫌な態度をあらわにし、わたしふくめて周りには、はれ物をさわるような対応か、その不機嫌さに不機嫌で応酬するという悪循環。また、文字にするのとはばかられるほど、様々な問題が社内外で毎日のように起きていました。

ほとほと困りはて、精神的にもずいぶんと追いつめられたわたしは、苦しまぎれに手にとった素心学塾塾長池田繁美先生の著書に、「苦悩をやわらげる方法」として、次の五項目が書かれてあるのを目にしました。

- 1、苦を受入れる
- 2、自己のあやまちに気づく
- 3、自己を正す
- 4、相手に謝す
- 5、「素心の五行」の継続

一縷の望みをかけ、このとおりに実行することを決めました。すると時間はかかりましたが、相手のわがままを引き出していたのは、わたし自身のわがまま（思いやりのなさ）だった、とだんだん理解でき、また経営者としての甘さや覚悟のなさを痛感したのです。しかし、4番目の「相手に謝す」でつまずきました。

心のなかでは、自分を正当化し、相手を責めるマイナスの感情がマグマのように湧きあがり、平常心をうしなない、とても謝ることができません。数か月間、毎日毎日悩みもがいた結果、ようやく勇気をふりしぼり、腹を決めて、一歩ふみ込むことを決めました。

謝罪の際、様々な感情が入りまじり、涙があふれ止まりませんでした。しかし、ある種の覚悟が自分のなかで確立されたことも実感できました。当時を知るスタッフは二名となりましたが、いまではその二名が会社の屋台骨をささえてくれる存在となっています。

「二十の徳目」の五番目は、「勇氣」です。「勇氣」とは、いざというときに、しっかりと自分の腹を決めて行動する気概、と池田繁美先生はおっしゃいます。目の前に困難が立ちはだかった際には、腹を決めて一歩ふみ込む勇氣をもって、事に当たりたいと思います。

加来 寛

